

絵地図（海路図）

海路図は、海運が発達するにしたがって、航海業者の間で、海路を記した図が作られるようになり、室町時代には簡単な海図があったと言われるが、現在残っていない。古田良一氏によると、「瀬戸内海の手路図、さらに西に延びて九州北岸を経て長崎までの海路図は多く残っている。古いものは承応年間（一六五二―一六五四）ころで、寛文には木版も刊行され、元禄になれば、その種類も多くなる。いずれも一七世紀の後半に当るが、このころから海路誌が多く著わされるようになり、それに伴って海路図も作られた。しかし大坂・江戸間、大坂・長崎間のものが多く、その他のところは陸を主とした図に航路を書き入れてあるものが多い。（略）江戸時代の海路図はただ航路および里程を記し、時に暗礁・砂州を付記するぐらいで、水深の記入なく、航海業者はほとんど熟練によって航海したのである。」とあり、次に紹介する一品は、江戸時代海路図の割合古い方に属するものである。

○ 西国海路之図

（常磐松文庫）

絵図一巻 彩色写 外題・内題・奥書なし 箱書「寛文十二年一延宝三年写」

大坂から対馬・長崎に至る瀬戸内海航路の彩色手描絵図である。地名・海路・潮流風向・港の出入の状態等を記してある。陸地については大名の城地の記載があり、これらと時代を照合すると、箱書同様、寛文十二年（一六七二）より延宝三年（一六七五）の間に描かれたものと思われる。